

## 論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1216 号	氏 名	吾 妻 寛 之
論文審査担当者	主 査 石 塚 修 副 査 宮 川 眞 一 ・ 小 泉 知 展		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>胸腺摘出術において、胸腔鏡下手術（VATS）の低侵襲性や安全性が報告されるようになってきた。しかし、VATS では胸膜播種が増加する懸念や、大きい腫瘍では被膜損傷の危険性について報告されている。</p> <p>また、予後についても小規模な研究が多く大規模研究が行われていないのが現状である。</p> <p>本研究では胸腺研究会の大規模データベースを用い、I, II 期胸腺腫における VATS 胸腺摘出術と胸骨縦切開による胸腺摘出術を予後、再発形式、切除断端陽性率、合併症発生率について比較し、その非劣勢を示すことで VATS の妥当性を検討した。</p> <p>また、VATS による胸膜播種の増加、VATS 適応基準における腫瘍径の妥当性についても検討を行った。</p> <p>その結果、吾妻 は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 正岡 I, II 期の胸腺腫において、VATS 群と胸骨縦切開（ST）群間に生存率、無再発生存率の差を認めなかった。</li><li>2. VATS 群と ST 群で再発率、特に胸膜播種の発生率に差を認めなかった。</li><li>3. VATS 群と ST 群で切除断端陽性率に差を認めなかった。</li><li>4. VATS 群と ST 群で合併症率に差を認めなかった。</li><li>5. VATS 群において、腫瘍径 5 cm を超える症例は切除断端陽性率や合併症発生率は増加しなかったが、再発率は増加した。しかし、腫瘍径 5 cm を超える症例での再発率は VATS 群と ST 群と同等であり、VATS の適応外とする理由とはならなかった。</li></ol> <p>これらの結果により、VATS は胸骨縦切開と比較し予後や切除断端陽性率、再発率、合併症発生率が同等であることを示せた。また、胸膜を広範囲に切開する VATS でも胸膜播種の発生率は上昇しないこと、VATS の適応基準において腫瘍径は絶対的な適応とはならないことが示唆された。</p> <p>以上に対し、主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			